

外来語とその言い換え表現からみた言葉の受け入れに関する研究

—新型コロナウイルス関連用語を例に—

イム ジョンス
林 廷修（筑波大学大学院生）

1. はじめに

言葉は絶えず変化する特徴を持っており、外来語はその変化を生じさせる一つの要因である。外来語と既存語又は類義語との関係については、以前より多くの研究の蓄積がある。代表的なものとしては、金(2006)、宮田・田中(2006)、久屋(2013)等が挙げられる。これらの研究は日本語の言語体系に定着し、広範囲で使用されている外来語とその類義語を取り上げ、言語内的(語の意味用法や共起関係)又は言語外的(媒体種、年齢等)に比較考察している。このように、日常生活に定着したと見られる外来語を対象とし、考察することは重要であるが、更新の早い外来語の特徴から考えると、新しく受け入れられつつある外来語がどのように定着していくかについて考察する必要があると思われる。特に、2020年から新型コロナウイルスが国際的に拡散したことに伴い、新しい言葉が増えており、日本語のみならず多くの言語に大きな影響を及ぼしている(Oxford English Dictionary 2020)。そこで本研究では、新聞における新型コロナウイルス関連(以下、コロナ関連)の外来語とその言い換え表現に焦点を当て、それぞれの使用傾向と意識の関係を調べることにより、外来語の定着過程を明らかにすることを目的とする。本研究での言い換えとは、ある表現を意味が等価な別の表現に変えること(松吉・佐藤2008)であり、新聞記事において丸括弧で囲まれている訳語を便宜上言い換え表現と呼ぶこととする。

2. 調査の概要

まず、コロナ関連用語を抽出するため、全国紙の一つである毎日新聞から「新型肺炎」「COVID」「コロナ」のキーワード検索でコロナ関連の新聞記事を収集した(2020年1月～12月の本文のみを対象、計118,912文)。次に、収集した記事から抽出したカタカナ語の中でコロナ関連の外来語を抜き出した。ただし、「マスク」「ウイルス」「ワクチン」のような既に広く普及していると思われるものは調査対象から除外した。さらに、これらの外来語とその言い換え表現との関係を調べるため、抽出語が括弧付きの言い換え表現を伴わず、外来語のみで現れるもの(L1)、外来語に括弧付きの言い換え表現が後続するもの(L2)、言い換え表現に括弧付きの外来

語が後続するもの(N1)に分類した。加えて、外来語を伴わず、言い換え表現のみで現れるもの(N2)の存在も推定されるため、抽出した括弧内の言い換え表現を基に再検索を行った。その上で、L1、L2を外来語、N1、N2を言い換え表現と見なし(表1)、外来語と言い換え表現を合わせた出現数が30例以上のもの(異なりで8語、延べで2,136語)に限定してそれぞれの割合を算出した。最後に、母語話者の持つイメージが外来語や言い換え表現の使用傾向と関連しているか否かを検討するため、日本語母語話者(62名)を対象にオンラインでの意識調査(2021年1月15日～31日の間)を実施した。

表1 外来語と言い換え表現における割合の算出方法

区分		例	算出方法	
			外来語	言い換え表現
外来語	L1	ロックダウン	1	0
	L2	ロックダウン(都市封鎖)	1	0
言い換え表現	N1	都市封鎖(ロックダウン)	0	1
	N2	都市封鎖	0	1

3. 結果

3.1 新聞におけるコロナ関連用語の使用傾向

図1は、収集した新聞記事を3ヶ月ごとに区切り、言い換え表現の有無と外来語の出現数をまとめたものである(図中の折れ線は出現数の合計を表す)。ここから、コロナ関連用語の使用傾向を大きく五つに分類することができる。第一に、(a)「コロナショック」(b)「ポストコロナ」は、言い換え表現が示されず、もっぱら外来語のみで使用されるものである。第二に、(c)「オーバーシュート」は時間の経過とともに外来語が使われなくなったものである。図1を見ると、この語は1月から3月まではある程度使用されていたものの、4月から半分程度になり7月以降は全く使われておらず、言い換え表現(「感染爆発」)に置き換えられていることが分かる。第三に、(d)「パンデミック」は「世界的(な)大流行」という言い換え表現があるにもかかわらず、外来語が圧倒的に多いものである。第四に、(e)「クラスター」(f)「テレワーク(リモートワーク)」(g)「ロックダウン」はそれぞれ「集団感染・患者集団等」「在宅勤務」「都市封鎖・全土封鎖」の言い換え表現を持つが、外来語の使用が増加傾向にあるものである。特に「ロックダウン」は、10月になって外来語の使用が急増した点で、「クラスター」「テレワーク(リモートワーク)」とはやや異なる振る舞いを見せている。第五に、(h)「ソーシャルディスタンス(ディスタンス)」は他のいずれとも異なる傾向を示すものである。この語は月ごとの使用傾向のばらつきが大きいことから、今後さらに検討する必要がある。

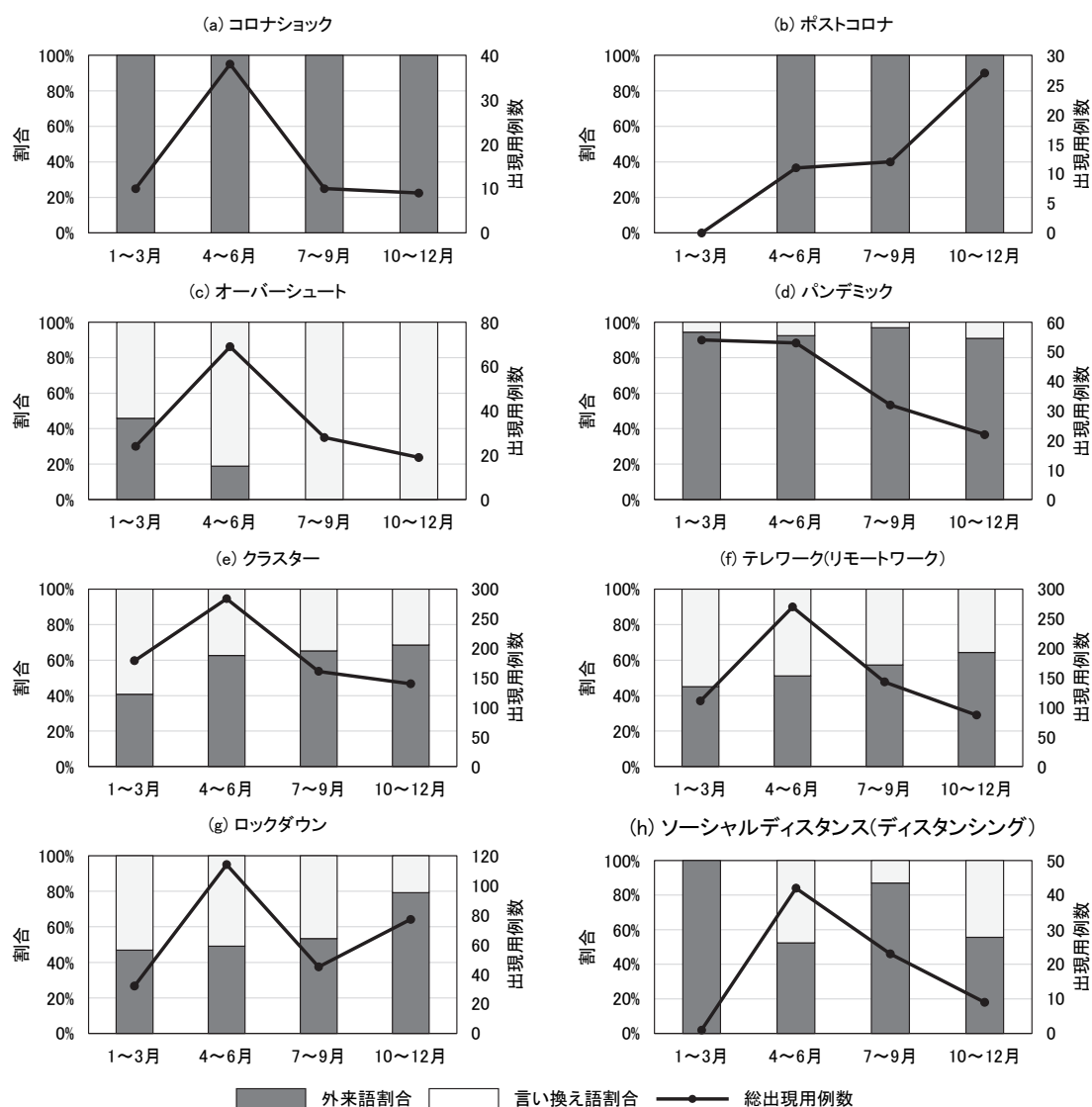


図1 新聞におけるコロナ関連の外来語とその言い換え表現の使用割合

3.2 コロナ関連用語に対する日本語母語話者の意識

続いて、3.1の使用傾向と人々の意識が関係しているかどうかを検討するため、コロナ関連用語に対する日本語母語話者の意識調査を行った。調査は、母語話者がより回答しやすくなるよう、コロナ関連の外来語とその言い換え表現の両方を提示した。また、国立国語研究所(2005)を参考にして作成した表2の反対の意味を持つ8項目の尺度において、それぞれAとBのどちらに近いかを5段階(「Aに近い」「どちらかというAに近い」「どちらともいえない」「どちらかというBに近い」「Bに近い」)で回答させた。その際、言い換え表現のすべてを列挙することは容易でないと判断したため、出現用例数の最も多い表現のみを提示することとした。なお、

「コロナショック」と「ポストコロナ」は言い換え表現が観察されなかったため、意識調査からは除外した。

表2 意識調査における8項目の尺度

区分	A	B	区分	A	B
1	簡潔である	冗長である	5	やわらかい	かたい
2	カッコいい	古くさい	6	分かりやすい	分かりにくい
3	婉曲である	露骨である	7	馴染みのある	馴染みのない
4	軽い	重い	8	肯定的である	否定的である

図2は、得られた回答を基に、コロナ関連の外来語とその言い換え表現の尺度対の平均値を求めたものである。これらの全体的な傾向について見ると、外来語の方が相対的に「カッコいい」「婉曲である」「軽い」「やわらかい」のAに近い反面、言い換え表現の方はBに近いことが確認できる。これとは対照的に、分かりやすさにおいては言い換え表現の方が「分かりやすい」のAに近く、外来語は「分かりにくい」のBに近いことが分かる。ただし、「ソーシャルディスタンス(ディスタンス)」は独特な特徴を示している。

外来語別の特徴を見ると、図1で時間の経過とともに外来語が使われなくなった「オーバーシュート」は、外来語の方を相対的に「冗長である」「分かりにくい」「馴染みのない」と感じる傾向が著しく、これらにおける外来語と言い換え表現の差が他の言葉に比べて大きい。特に「外来語の分かりやすさは、外来語の定着度との相関が大きい(田中2007:310)」と言われていることから、これが「オーバーシュート」の消滅と関連している可能性が示唆される。また、この語は英語においては「(目的地などを)行き過ぎる」「(目標を)外す」「(限度・目標を)超える」といった意味で用いられるが、日本語においてはやや異なる意味で用いられており、その点がこの結果に影響した可能性も推察される。さらに、外来語の使用が言い換え表現よりも圧倒的に多い「パンデミック」と、言い換え表現があるにもかかわらず、外来語の使用が増加傾向にある「クラスター」「テレワーク(リモートワーク)」「ロックダウン」は、「オーバーシュート」と比較して簡潔さと分かりやすさ、馴染みの度合いにおける外来語と言い換え表現(それぞれ世界的大流行、集団感染、在宅勤務、都市封鎖)の隔たりが小さいことが分かる。ただし、外来語に対する意識の違いが使用実態に影響しているのか、使用実態が母語話者の意識に影響しているのかは判断できないため、因果関係までは説明できない。

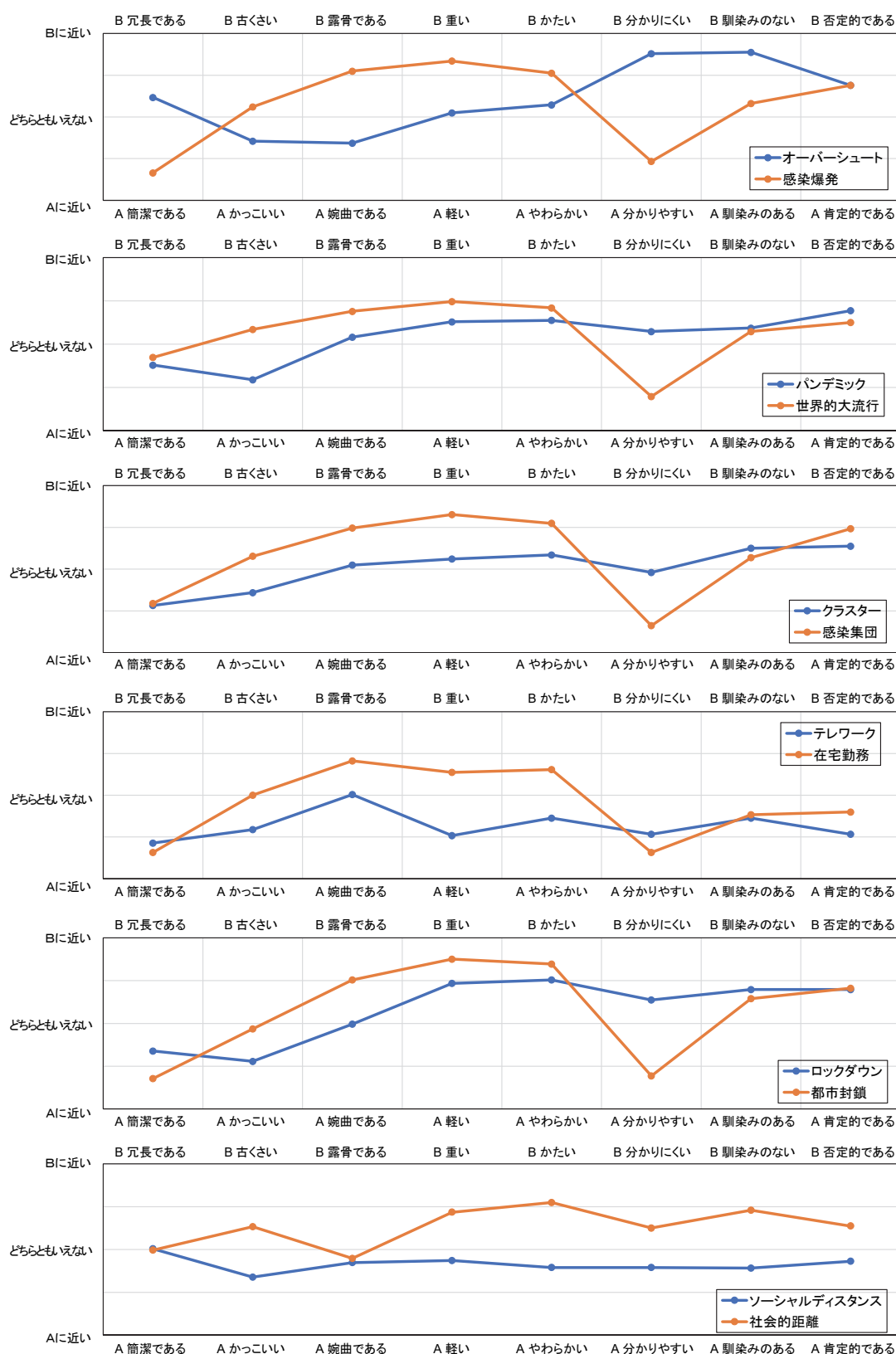


図2 コロナ関連の外来語とその言い換え表現に対する日本語母語話者の意識

4. おわりに

本研究では、コロナ関連の外来語とその言い換え表現の使用傾向、またそれと人々の持つ意識の関係を分析することにより、外来語の定着過程を明らかにした。まず、新聞に出現した外来語とその言い換え表現の数を3ヶ月単位で区切って比較したところ、①言い換え可能な表現が示されず、外来語のみで使用されるもの、②時間の経過とともに外来語が使われなくなったもの、③言い換え表現はあるが、外来語が圧倒的に多いもの、④言い換え表現があるにもかかわらず外来語の使用が増加しているもの、⑤さらに検討の余地があるものの特徴を見出すことができた。次に、これらの語に対する日本語母語話者の意識を調査した結果、外来語は言い換え表現に比べて相対的に「かつこいい」「婉曲である」「軽い」「やわらかい」と意識されやすく、また理解のしやすさにおいては言い換え表現の方が外来語よりも「分かりやすい」と意識されることが全体的な傾向として把握できた。また個別的な特徴としては、「オーバーシュート」は簡潔さと分かりやすさ、馴染みの度合いにおいて外来語と言い換え表現の差が顕著であるのに引き換え、「パンデミック」「クラスター」「テレワーク(リモートワーク)」「ロックダウン」は相対的にその隔たりが小さい傾向が見られた。この意識の違いが使用実態に影響を与えているのか、使用実態が母語話者の意識に影響を与えているのかは判然としないが、言語使用が人間の行為の一つであることから考えると、二つが密接に関係していることは確かである。

以上の考察により、新しく受け入れられた言葉の使用がどのように変化していくかを明らかにした。このような考察を継続的に行うことで、新しい言葉の受け入れを考えた言語政策や言語教育に対して基礎的な情報を提供するための一助となると考えられる。今後は他の言語についても調査し、その結果を日本語と比較、検討することが望まれる。

参考文献

- 金愛蘭(2006)「外来語「トラブル」の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』2(2)、pp. 18-33.
- 久屋愛実(2013)「現代書き言葉における外来語の共時的分布—「ケース」を事例として—」『国立国語研究所論集』6、pp. 45-65.
- 国立国語研究所(2005)『外来語に関する意識調査Ⅱ(全国調査)』
- 田中牧郎(2007)「漢語・和語と比較した外来語に対する意識」『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』国立国語研究所報告126、pp. 302-310.
- 松吉俊・佐藤理史(2008)「文体と難易度を制御可能な日本語機能表現の言い換え」『自然言語処理』15(2)、pp. 75-99.
- 宮田公治・田中牧郎(2006)「外来語「リスク」とその類義語の意味比較—既存の類義語を持つ外来語の存在理由—」『言語処理学会 第12回年次大会発表論文集』pp. 600-603.
- Oxford English Dictionary(2020) *Oxford languages 2020 words of an unprecedented year*. Oxford: Oxford University Press. <https://languages.oup.com/word-of-the-year/2020/>